

「富坂プレディガーゼミナール」準備会

指導者養成講座(富坂プレディガーゼミナール)の 必要性と方向性

三村 修

序

2022年度から、富坂キリスト教センターの活動の一つとして、「指導者養成講座(富坂プレディガーゼミナール)準備会」が発足した。この準備会が提供しようとしている講座は、牧師あるいは牧師のような役割をしている人々のための継続教育の場だ。

この講座が対象としている人々について、厳密な定義は控えておこう。というのも、牧師の定義にせよ、呼称にせよ、それぞれの理解や教派的伝統によって多様性があり、またその中に牧師以外の人を含むのかどうかについても議論の余地がありそうだからだ。とりあえず、ここでは「牧師あるいは牧師のような役割をしている人々」として話を進めよう。

継続教育とは何か。一般的な意味としては、土木学会の説明が端的だ。「継続教育(Continuing Professional Development : CPD)とは、技術者一人ひとりが自らの意志に基づき、自らの力量(Competencies)の維持向上を図るために行うもの」(<https://committees.jsce.or.jp/opcet/cpd>)。

また日本看護協会は、看護師にとっての継続教育を定義している。「看護における継続教育とは、看護の専門職として常に最善のケアを提供するために必要な知識、技術、態度の向上を促すための学習を支援する活動である」(「継続教育の基準 ver. 2」、2012年4月、公益社団法人日本看護協会)。

土木学会も日本看護協会も、「向上」という言葉を使っているが、向上という言葉は、漠然とではあるが、何らかの評価基準のようなものを想定している。一般的な専門職にとっては、それまで以上に一般社会の必要を満たすことができれば「向上」ということになるだろう。

一方、教会や牧師が大切にしている聖書は、この世的な評価基準とは異なる、あるいは相反する価値観を示している。「人は目に映ることを見るが、主は心によっ

て見る」(サムエル上16:7)。

一般的には、多いことが好ましいと思われるような時にも、神は「あなたの率いる民は多すぎる」(士師記7:2)と言われる。一般的には、勇ましき、速さが求められるようなことについても、詩編の詩人は「主は馬の勇ましさを喜ばれるのでもなく／人の足の速さを望まれるのでもない」(詩編147:10)と歌う。イエスは大勢の金持ちのたくさんのお金よりも、貧しいやもめのレプトン銅貨二枚の方が、だれよりもたくさんだと言う(マルコ12:41-44、ルカ21:1-4)。

一般社会とは真逆、あるいはあべこべの価値観を示し続ける聖書を拠る所とする教会や牧師にとって、「向上」という言葉には違和感が伴う。ここでは「向上」の代わりに「変化」という言葉を提案する。後述するようにイエス自身が対話の中で変化しているからだ。

本稿では技術者や専門職の人たちが用いている定義を参考にしながら、継続教育とは、力量の変化、知識の変化、技術の変化、態度の変化を促すための学習を支援する活動である、と暫定的に定義しておこう。

では、牧師あるいは牧師のような働きをしている人々にとって、継続教育は必要だろうか。もし、必要であるなら、それはどのようなものだろうか。

準備会としては、継続教育は必要であると考えている。そして、準備会は「み言葉への傾聴」「共同の学び」「共同生活」を基本的な柱とする数日間の合宿による学びの場を提供しようとしている。

本稿では継続教育が必要な理由と、準備会が提供しようとしている学びの場の方向性とその理由について述べる。

1. なぜ継続教育が必要か

(1) 現場の声

教会はすべての人に開かれている。そこには様々な苦しみや悩みを抱えている人が訪れる。教会を訪れる、ということは、そこにいる牧師に対する信頼や期待がある、ということであり、牧師たちは何とかして、その信頼や期待に応えようと真剣に努力している。個人的、内面的な問題から社会的問題まで、魂のケアといった繊細な問題から、平和や環境といった地球規模の問題にいたるまで、多種多様な問題への応答を求められているのが牧師たちである。

だれかが苦しみの叫びをあげるとき、それは神が世界に関わる瞬間でもある。

聖書の神は民の苦しみの叫びを聞く神だからだ。「わたしは、エジプトにいるわたしの民の苦しみをつぶさに見、追い使う者のゆえに叫ぶ彼らの叫び声を聞き、その痛みを知った」(出エジプト3:7)。

民が声を上げ、神が応えようとするその出来事に寄り添い、仕えることは牧師の役割であるが、その一方で、民と神に寄り添おうとしている牧師に神が寄り添っている。そしてもし、その牧師に寄り添う誰かがいれば、その誰かは神の臨在のしるしとなる。そのとき、その誰かは牧師としての役割を担う。つまり牧師に寄り添うのも、牧師あるいは牧師のような役割を担っている人なのだ。

問題には、答えのある問題と答えのない問題がある。牧師たちを悩ませているのは模範解答が発見されていない問題だ。国際問題にせよ、国内問題にせよ、そのような問題が明るみに出てくるのは従来の国際関係や社会制度のままでは人々の苦しみが増すようになるときである。人々が上げる苦しみの声は、従来の国際関係や社会制度の変化の兆しだ。人間関係の悩みについても同じことが言える。従来の関係性で苦しむ誰かが声をあげるとき、問題が明るみにでる。それは関係性が変化する兆しとなる。

この変化の兆しに寄り添おうとする牧師たちの中から、自分自身が変化することの必要性を自覚する牧師たちが現れている。自分自身の力量の変化、知識の変化、技術の変化、態度の変化を求める牧師たちがいるのである。継続教育の場を求めているのは何よりも牧師たちである、ということについて、統計調査があるわけではないが、それはこれまで富坂キリスト教センターの牧師研修プログラムに関わり、現場の牧師たちと出会ってきた私自身の率直な実感である。

(2) 聖書における継続教育

聖書の登場人物たちにとっては、修業時代を終えてなんらかの役職に就けば、それで学習は終わりという発想はなかつただろう。

モーセのしゅうとで祭司であるエトロは、モーセが「民のために行っているすべてのことを見て」助言を与える。「あなたのやり方は良くない。あなた自身も、あなたを訪ねて来る民も、きっと疲れ果ててしまうだろう。このやり方ではあなたの荷が重すぎて、一人では負いきれないからだ。わたしの言うことを聞きなさい。助言をしよう」(出エジプト18:17-19)。今日でいうOJT(On the Job Training, 現任訓練)、スーパーバイズ、コーチングがなされたわけである。

エリヤは神の声に従ってエリシャを自分の後継者として選ぶ。エリシャはエリ

ヤに「従い」、エリヤに「仕えた」(列王記上19:21)。エリヤが預言者としての活動をいつ始めたかについて明確な記述はないが、エリヤが天に昇って行くとき、そこには預言者の仲間五十人がいた(列王記下2:7)。その時すでに、エリヤは預言者の仲間たちの中の一人であったわけであるから、それ以前に、エリヤはエリヤから油を注がれ(列王記上19:16)、預言者としての活動は始まっていたとみるのが自然だ。預言者として活動しながら、エリヤの手に水を注ぎながら(列王記下3:11)、知識、技術、態度についてエリヤは学び続けていたであろう。

バプテスマのヨハネから洗礼を受けたときには、イエスは神から与えられる職務に自分が就いたことを自覚していたであろう。そこでイエスの修業時代は終わりにならなかった。マタイ、マルコ、ルカ、いずれの福音書においても、イエスが荒野で試練を受けるのは洗礼の後である。

イエスの公の場での活動は、カファルナウムで「神の国は近づいた」(マルコ1:15、マタイ4:17)と宣言するところから始まる。しかし、それでイエスの力量、知識、技術、態度が完結したわけではない。

娘から悪霊を追い出してくださいと依頼する母親に対して、イエスは当初、自分の役割ではないと断るが、その母親との対話の中で態度を変化させる(マタイ15:21-28、マルコ7:24-30)。公の活動を開始した後も、対話の中で自分自身が変化するような学びをイエスは継続していた。

(3) 教会形成としての牧師養成と継続教育

富坂キリスト教センター主事、岡田仁氏は2006年から2009年までクアハッセン・ヴァルデック州教会のホフガイスマル牧師研修所で研修を受けた。

ホフガイスマル牧師研修所は牧師補訓練と継続教育が結びついて実施されており、その創立は1891年にさかのぼる。1918年以降、多くの州教会は牧師補職にある一年間を、牧師研修所での一年間の滞在と組み合わせた。つまり牧師研修所での継続教育が教会制度の中に組み込まれた。

岡田によれば、牧師補訓練で重要なのは「教会のメンター(主任牧師)との話し合いと研修所のコースにおける実際的な経験に対する批判的な省察」であるが、牧師補職にある短期間のうちに、有用で望ましいと思われることの全てを見出すことは難しく、事柄の多くが後の継続教育で解き明かされ、深められる。そこにあるのは「諸課題を一人で背負い込むのではなく、共同で問題や課題を共有し、知恵を搾って一緒に担い克服する連携体制と揺るがぬ信頼関係(の構築努力)」で

ある。

ドイツでは、牧師研修システムは「牧師個人の資質向上だけでなく教会そのものをより豊かに形成するうえで必要不可欠なシステム」となっている。つまり、牧師養成は教会形成そのものであり、その教会は「共同（性）を必要とする教会」としてEKDは、自らを理解しており、連携体制、信頼関係を構築していく継続教育は、教会形成にとって必要不可欠である、という理解がここにある。

参考文献 岡田仁「富坂プレディガーゼミナールの構想」（本誌）

2. 指導者養成講座（富坂プレディガーゼミナール）の方向性

指導者養成講座（富坂プレディガーゼミナール）準備会は数日間の合宿による学びの場を提供しようとしている。

参加者の力量の変化、知識の変化、技術の変化、態度の変化を促すための学習を支援する継続教育にとって、数日間の合宿が適切な手段であると考えているからである。

富坂キリスト教センターは、牧師、専門家などによる心の病をテーマとした「相互教会協議会」を行い、2003年から共同生活における体得的な研修を目指し、「神を畏れ、神に仕える」の主題のもと各地での牧師研修、クラッパート合同研修、沖縄宣教研究所との共同研修会をこれまで実施してきた。

準備会は、富坂キリスト教センターのこれまでの歴史、経験をふまえ、数日間の合宿において、「み言葉への傾聴」「共同の学び」「共同生活」の三つのことがらを大切にしたいと考えている。

(1) み言葉への傾聴

この合宿では神のみを畏れ（第一戒）、共に祈り、賛美をささげ、み言葉に聴く時間を大切にしながら、礼拝コミュニティの形成を目指す。

それは「二人または三人がわたしの名によって集まるところには、わたしもその中にいる」（マタイ 18:20）という約束への応答としてのコミュニティ形成である。合宿は数日間で終了するので、それは期限付きの暫定的なコミュニティだ。

牧師あるいは牧師のような役割を果たしている人は教会というコミュニティの形成に日常的に奉仕しているわけであるが、その日常性のゆえにコミュニティの中の上下関係、利害関係が生まれ、イエスの名よりも、コミュニティの中の人間どうしの力関係にいつの間にかしぼられてしまう、ということがある。

教派的な壁を越えて集まり、礼拝コミュニティを形成するとは、神のみを畏れ（第一戒）、共に祈り、賛美をささげ、み言葉に聴く時間を、人間どうしの力関係から解放されたところで、改めて持つ、ということである。

キリスト者が教派的伝統を超えて、共に祈り、賛美し、み言葉を聴こうとするとき、予期しない違和感と出会うことがある。それは、他者を通して語り掛ける神の言葉と出会う機会であり、また自分自身の信仰生活を振り返る機会でもある。

日常の人間関係から離れたところでコミュニティを形成してゆく経験を通して、参加者が新しい気付きをそれぞれの日常の現場に持ち帰ることができるなら、それはそれぞれの礼拝コミュニティがより豊かで生き生きとしたものとなる助けとなるであろう。

(2) 共同の学び

合宿参加者は、それぞれの現場で、学びと経験を積んだ者として集まる。その一方で、富坂キリスト教センターは、キリスト教社会倫理の学際的研究を重ねてきている。

合宿は、それぞれの経験からの学びと、学際研究の成果とが出会い、参加者が相互に傾聴し、対話する機会となる。

「知恵と知識の宝はすべて、キリストの内に隠れています」（コロサイ 2:3）。キリストは他者として私たちに会う（マタイ 25:31-46）。参加者が相互に傾聴し、対話するとは、他者として私たちに会うキリストの内に隠れている知恵と知識の宝の探求である。

「人のうちにある霊以外に、いったいだれが、人のことを知るでしょうか」（I コリント 2:11）。どんな学びを必要としているのかは一人ひとり違っている。どんな学びを必要としているのかをもっともよく知っているのは参加者自身だ。

共同の学びは、参加者一人ひとりの多様な学びに貢献するであろう。

(3) 共同生活

富坂キリスト教センターの研究活動の焦点は、キリスト教社会倫理であり、それは、神の国の「たとえ」となるような社会の姿を追い求める歩みであった。この合宿ではコミュニティの形成を目指すわけであるが、その小さな暫定的なコミュニティが、神の国の「たとえ」となるようなコミュニティとなることを願っている。

合宿では、共に働き、相互に仕え合う経験を大切にす。生活を共にするとき、

そこには対立、軋轢、葛藤が生まれることであろう。日常生活のなかでは、やり過ぎることが多いかもしれないが、「小事に忠」であることを心掛けたい。その対立、軋轢、葛藤を、神が用意している祝福を受け取る機会へと転換してゆく経験を共にあじわえるような関係性の形成を大切にしたい。

私たちは、知識や情報があふれ、消費されていく世界に住んでいるが、この合宿は知識や情報を単なる知的理解に終わらせることなく、一人ひとりの血肉としていく歩みの一助となる場を提供したい。

「外的奉仕のための内的集中」の時間を共に過ごし、それぞれの現場にもどったとき、一人ひとりが、それぞれの場で、世界を刷新しようとしている神の働きに、これまで以上の喜びと共に仕えることができる場となることを願っている。

まとめ

「指導者養成講座（富坂プレディガーゼミナール）準備会」は、牧師あるいは牧師のような役割をしている人々のための継続教育の場を提供しようとしている。継続教育とは、力量の変化、知識の変化、技術の変化、態度の変化を促すための学習を支援する活動である、と暫定的に定義する。

なぜ継続教育が必要かと言えば、それが現場の牧師たちが求めているからであり、聖書の登場人物たちも、神から与えられた職務を引き受けたあとも、学びを継続したからである。そして、牧師養成は教会形成の一環であり、牧師養成にとっては現場の経験をふり取りながら学ぶ継続教育が必要不可欠だからである。

指導者養成講座（富坂プレディガーゼミナール）準備会は数日間の合宿による学びの場を提供しようとしているが、準備会は、富坂キリスト教センターのこれまでの歴史、経験をふまえ、数日間の合宿において、「み言葉への傾聴」「共同の学び」「共同生活」の三つのことがらを大切にしたいと考えている。

この講座が参加者にとって、神の国の「たとえ」を生きる経験となり、その経験が、参加者の人生にとってのパン種となること、そして、講座参加者が、それぞれの日常で所属しているコミュニティのパン種となること、そして、そのコミュニティがこの社会の中のパン種となっていくことを願いながら、現在準備を進めている。